

啓蒙の時代の女性と向上心

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2020-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 実佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027098

啓蒙の時代の女性と向上心

鈴木実佳

規則正しい毎日を送り、外の新鮮な空気を吸って、よく運動し、読書を少し、そして貧者にたいして善行を。これが健全な生活。

スペンサー伯爵夫人からハウ夫人へ。1781年12月29日付

we keep good hours, take a great deal of Air & exercise, read a little & do good among the poor all which are very wholesome.

Lady Spencer to Mrs Howe, 29 dec 1781¹

1) はじめに

アマンダ・フォアマンによる伝記『デヴォンシャー公爵夫人』(*Georgiana, Duchess of Devonshire*, 1998) は、出版されるや、英米で好評を博し、文学賞を受賞し、ラジオ劇になって放送され、そして映画化もされた。脚光を浴びて華やかで、そして寂しげな生涯を送った女性の伝記が、世の中の注目を集めて印象的だった²。これは、フォアマンの学位論文から発展させた伝記で、一人の女性の生涯を語ることで、こんなにも可能性をもっているということを示した。彼女は、博士の学位(DPhil at Lady Margaret Hall, Oxford, *The Political Life of Georgiana, Duchess of Devonshire, 1757-1806*, 1998) を得て、伝記出版により、伝記作者及び歴史家としての名声を獲得し、その後も主に女性の社会での活躍を描いて、著作と学術の世界だけでなく、王室のコレクションの展示企画を行うなど、活

¹ The British Library, Add MSS, 75617.

² Amanda Foreman (1968-); *Georgiana, Duchess of Devonshire* (Harper Collins, 1998); 1998 Whitbread Awards for Best Biography 受賞; ラジオ劇(BBC Radio 4, dramatised in 15 parts by Jennifer Curry starting on Mon 13 Dec 1999, with Juliet Aubrey as Georgiana; Judi Dench as Mrs Chatterton), 映画 (2008, with Keira Knightley as Georgiana. Ralph Fiennes as the duke and Charlotte Rampling as Lady Spencer). デヴォンシャー公爵夫人は、2019年にはBuxton International Festivalにてopera pasticcioとしてオペラの素材にもなった(7-20 July 2019, directed by Matthew Richardson, Georgiana sung by Samantha Clarke and Lady Spencer by Olivia Ray)。

動の範囲を広げている³。

そのフォアマンの伝記において、ジョージアナの母スペンサー伯爵夫人 (Margaret Georgiana, Countess Spencer, 1737-1814) は、愛情深く、知的で、躰に熱心な母親として描かれている。深い愛情で結ばれている母娘であるが、その母親の娘への期待と、それゆえの締め付けが、娘の人格を規定し、そこで得た特質のために、娘は自らを窮地に追い込んでいく。しかも母親は自分の娘への接し方が、娘の不幸の要因であることを理解しない。長男が生まれた後も、その一年前に生まれていたジョージアナに対する母の「熱狂的な愛情は薄れることがなかった。」⁴「スペンサー伯爵夫人は自らが宮廷人の娘として育てたので、ジョージアナの人前での身の処し方に人一倍うるさかった。母が娘に関して判断したり、褒めたり、教育の方向性を決める基準となっていたのは、宗教を除けば、人前での振る舞いだけと言ってもよかった。」そして、「母親が社会的スキルを重んじたので、娘は人目を気にして常に演ずるようになっていった。」⁵「娘が注目的になることが上手いのみを喜んで、なぜそうなっているのか母親には理解できなかった。」「スペンサー伯爵夫人は、娘が注目を必要としていることも、そのことが彼女の人格形成に及ぼしている影響も、理解することができなかった。後に、ジョージアナの不幸に自分が果たした役割を考えざるを得ない状況になったとき、彼女は自分あまりにも甘い親だったと思っ て自責した。」⁶

この記述からは、あまりに清廉潔白で品行方正のお手本を目指して娘を追い詰め、彼女の愛情が、娘をあたたく包み込んで守るものというよりも、その愛情の強さゆえに娘がより深刻な窮地にはまってしまうかのような描写である。母親があまりにできた人物なので、娘は自信を欠き、自己を尊重することができなくなるのである。娘の人生の困難が、まるで母親があまりにも人の行動の表面にでる所作などに重点をおいて育てた結果であるかのような書き口になっているように読める。伝記は娘のジョージアナを主人公とし、彼女が深い問題をかかえる人生を送っているのも、その問題のひとつの原因を強い絆と影響力をもった母親に見出すのは、当然であるかもしれない。しかし、原因をつくってにおいて、自分の責任を理解しようとしないう無責任な母親の犠牲にな

³ 'Queen Victoria's Palace', Buckingham Palace summer exhibition, 20 July 2019-29 Sep 2019.

⁴ Foreman, *Georgiana*, pp. 3-4.

⁵ Foreman, *Georgiana*, p. 9.

⁶ Foreman, *Georgiana*, p. 10.

る娘という構図で、娘は母親の思い込みと頑強さの被害者になっているかのようだ。母親について、じっくりと検討する必要があるだろう。彼女は、娘以上に、現在の私たちが参照することが可能である資料を残してくれているのであるから。

スペンサー伯爵夫人は、宮廷や外交交渉の舞台で活躍したスティーヴン・ポインツ (Rt. Hon. Stephen Poyntz, 1685-1750) と美女の誉高く、ジョージ二世 (1683-1760) の妃キャロライン (Queen Caroline, 1683-1737) 付の女官 (a maid of honour) を務めたアナ・マライア (Anna Maria Poyntz, nee Mordaunt, c.1712-1771) との間に生まれた⁷。父は、貴族の子弟の教育に携わり、夫妻は小説家リチャードソン (Samuel Richardson, 1689-1761) との親交をもち、フィールディングの女子教育物語には、ポインツ夫人への献辞があり、スティーヴン・ポインツの教育への関わりにも言及がある⁸。彼女の結婚相手は、結婚当初爵位こそもっていなかったが、土地所有者の父親から相続した財産の他に、モールバラ公爵夫人 (Sarah Churchill, duchess of Marlborough, 1660-1744) の莫大な富を受け継いだジョン・スペンサー (John Spencer, 19 Dec 1734-1783, 1st Viscount Spencer, of Althorp and 1st Baron Spencer of Althorp, 1761; 1st Earl, 1765) だった⁹。彼が21歳となって成人した翌日の1755年12月20日に、二人の結婚式が執り行われた。ジョン・スペンサーは、1765年には伯爵となり、妻マーガレット・ジョージアナは伯爵夫人となった。

スペンサーは、金銭的・社会的・文化的に恵まれた環境で育ち、結婚後さらに恵まれることになった。夫ジョンが、幼少の頃より身体が弱く病気がちであることが彼女をいつも悩ませていたが、夫婦仲が良く、病気のこと以外は何も不満も不安もないという立場だった。知識人の知り合いが多く、知的・文化的に多くの刺激を得て、会話を楽しみ、書物を読んで論じ、自己研鑽に余念のない日々を過ごす人だった。

18世紀の才女のなかでも、おそらく最も名声高く、男女の知識人の深い尊敬

⁷ Anna Maria Mordauntの美しさは、サミュエル・クロクソールの 'The Fair Circassian, a Dramatic Performance' (London: Printed for J. Watts, 1720) の中でも称えられている。

⁸ Sarah Fielding, *The Governess, or, The little female academy: being the history of Mrs Teachum and her nine girls, with their nine days amusement* (London, 1749), iv-v.

⁹ アン女王の時代 (1665-1714、位1702-14) モールバラ公爵夫妻は非常な影響力をもち、公爵夫人は、アン女王の側近であった。彼女は、賃料収入や有価証券などの資産の他に、ウインブルドン・パークなど400万ポンドもの価値をもつ土地と屋敷 (27物件) を所有しており、その財産の大部分をジョン・スペンサーが相続した。ただし、王室の官職や年金を受け取らないことを条件とし、相続人の政治的活動を制限する遺言がついていた。

を集めていた人物と言ったときに多くの人が名前を挙げるであろうエリザベス・カーター (Elizabeth Carter, 1717-1806) にたいして、カンタベリー大司教にもなったセッカー (Thomas Secker, 1693-1768) のもとで教育を受け、カーターのエピクテータス翻訳出版 (1758) にも大きな役割を果たした知識人キャサリン・トルボット (Catherine Talbot, 1721-1770) が、次のように言った。「物腰の優雅さ、軽やかさに、謙虚で、常識があつて、かわいらしさを備え、生き活きとして、無垢で、誠実な面持ちと、同じように生き活きとして魅惑されずにはいられない態度を組み合わせてみましょう。そこに現れるのは誰でしょう？」カーターの答えは、「スペンサー夫人でしょう。」だった¹⁰。トルボットの褒め言葉は、さまざまな方面の美德を網羅しているようである。ただし、常識 (sense) は含まれているものの、彼女の知性に特別な強調がないのは、少々残念ではある。ここでは、知的好奇心にあふれ、人当たりが良く、気取ったところのない人物で、優雅でありながら、社交性に富む18世紀のひとつの理想であった円滑な人間関係をつくることのできるような、交際場で好まれる楽しさと誠実さをもった女性を想定しよう。また、評者が教養のある知的な女性であることに注目しておこう。スペンサー伯爵夫人は、高い教育を受けた女性たちの間で、バランスのとれた人柄、物腰、内面を評価されていた。

本人が自分を表現するものとして選んだ肖像画においても、知性と愛情と、社会の流行を積極的にとりいれる感覚と富をもち、時代の動きに敏感なアンテナをもつ人が創り出す優雅さに重点がある。彼女の肖像画には、レノルズ (Sir Joshua Reynolds, 1723-1792)、バトーニ (Pompeo Batoni, 1708-1787)、ゲインズバラ (Thomas Gainsborough, 1727-1788) によるものがある。いずれの画家も肖像画家として大いに人気を博していた。彼女は流行の画家に肖像画を描かせることができる立場にあったのである。23歳のころの若い母としての肖像画 (レノルズ) は、台の上ののったジョージアナを両手で囲むようにし、左下からは愛玩犬が仲間に入れてほしいような様子で、右前足をもちあげている¹¹。3歳か4歳くらいのジョージアナを台の上に乗せることで、娘の顔は母親の顔よ

¹⁰ Elizabeth Carter, Catherine Talbot, and Elizabeth Vesey, *A Series of Letters between Mrs. Elizabeth Carter and Miss Catherine Talbot, from the Year 1741 to 1770; to Which Are Added, Letters from Mrs. Elizabeth Carter to Mrs. Vesey, between the Years 1763 and 1787*, Published from the Original Manuscripts in the Possession of the Rev. Montagu Pennington, M.A (New York: AMS Press, 1975) II, pp. 323, 324-25. この会話が交わされ、手紙に記された1760年には、スペンサーは爵位をもち、ここでカーターは「スペンサー夫人 (Mrs Spencer)」と答えている。

¹¹ 狩猟のための猟犬とは別に、小型愛玩犬を飼うことは、18世紀の新しい流行だった。

り高い位置に描かれ、娘の腕が母親の首から肩にかけている。母親は、その手の動作（娘を守ろうとする姿勢あるいは、娘を独占しようとする動作）のためか、心持ち不安な様子である。27歳のころのバトーニによる肖像画では、一人で椅子に腰かけて、3枚のなかでも最も落ち着いた様子でこちらを見ている。衣服には優雅で美しい白いレースが施され、彼女の手元周辺には、音楽及び書籍への興味を示すものが置かれ、窓の外の建物は、ローマの古典への興味を表している。息子（George Spencer, 2nd Earl, 1758-1834）の結婚（1781）祝いをするために描かれた肖像に目を移そう。これは、彼女が43歳のころ（1780-1781）の、ゲインズバラによる肖像で、彼女は肖像画を眺める者から視線をそらして、考え深げにしている。この頃、夫の健康状態が悪化していた。彼女の衣服は、首回りが白い他は全体的に地味な色であるが、暖かそうで活動的で着心地のよさそうな流行の乗馬服である¹²。乗馬服は、乗馬の際は勿論、旅の衣服でもあり、楽でおしゃれで活動的な日常着として用いられ、その価値観が好まれて、数多くの女性たちが肖像画を描いてもらうときの衣装として好んで選んでいた。

2) 幸福

スペンサー伯爵夫人は、社会的に恵まれた環境で育ち、想像を超えるような大金持ちの男性と恋に落ちて、幸せな結婚をし、そして彼が結婚後に爵位を得て、彼女は伯爵夫人となった。社会的、経済的に、これほど恵まれた人はごく少数しかいないであろう。彼は、幼少の頃からその健康保持、あるいは生命が危ぶまれるような、身体の弱い人だったので、その点でいつも心配がつきまとったが、夫婦仲がよく、結婚生活は彼女に幸せを提供していた。彼らは、5人の子どもに恵まれ、そのうち4人目と5人目の女の子をごく幼いときになくした（Charlotte, 1765-1766; Louisa, 1769-1769）が、娘二人（Georgiana; Henrietta Frances, 1761-1821）、跡継ぎの息子一人（George John, 2nd Earl Spencer, 1758-1834）を育て上げた。

彼女は、夫に対する愛情を表現することを好み、また自分の愛情深い妻としての立場を好んで強調した。彼女はまた、長期にわたって密接な繋がりを保つ親友をもつという幸運にも恵まれて、心理的・感情的に非常に幸福な人生を過

¹² Cally Blackman, 'Walking Amazons: The Development of the Riding Habit in England during the Eighteenth Century', *Costume* 35-1 (2001): 47-58.

ごすことになった。結婚前の若い頃から、詩人クーパー（William Cowper, 1731-1800）の従姉妹（Theadora Jane Cowper, 1734?-1824）とかなり親しい手紙を交わしていた¹³。長い人生を同じ年に終えることになる親友、ハウ夫人（Caroline Howe, 1721-1814）との親交は、スペンサーが20代のころから始まっていて、その後55年ほど頻繁な文通が交わされ、ロンドンに行けば直接会い、勉学や趣味、そしてゴシップを共有する相手になっていた。ハウは1769年頃に夫を亡くし、スペンサーは1783年に未亡人となった。それぞれの夫の存命中から、頻繁に手紙を交わしていたが、困難に見舞われたとき、頼ることができる親しい人が家族以外にもいるという幸福をこの二人は互いに与え合っていた。

このように、外部環境的にも、内面的にも、幸福を感じる要素が数多くあって、現状を享受し、維持することで十分満足であったであろうスペンサーであるが、彼女は勤勉に日々を過ごし、向上を求めることに努めた。彼女の手紙、日記、その他の記録には、彼女が書物や手紙や、日々の会話で得た価値観、自分の考察など、多様な見解が記されている。彼女は、自分の思考過程を記すことを好んで、自分に起った変化や葛藤を文書に残しているのので、18世紀の啓蒙の時代に、著作家でも哲学者でもない、一般の女性がどんなことを考えていたのか、自分に何を課していたのか、それを知る機会を提供してくれている。

スペンサーは、自分の特権的な立場や、享受している幸福について、まるでそれが弁解しなければならないものであるかのように感じていた。彼女の生活は、贅沢や快楽に満たされていて、そのことが彼女を時折り悩ませた。世俗的幸福に恵まれることと、それをどう受け止めるかに関する彼女の基本的な考え方は、キリスト教徒らしいものであった。

彼女は、しばしば「改善」を話題にしている。モノ、事態の改善だけでなく、精神や頭脳の改善について特に関心を寄せている。その際、自己の弱さを知る必要性を感じ、自己を制御する能力を行使できるよう、自分を鼓舞するということも行っている。彼女が重んじる改善は、完璧を目指す個人にかかわるものであって、社会全体のことや歴史的進歩を考えることは滅多にない。その完璧さは、神のような完全無欠なものであり、その文脈では、人間のどんな希求も野望も、人間的欠点という制限に阻まれる。

¹³ Add MSS 75691. William Cowperの父とTheodoreの父Ashley Cowperは兄弟であった。

3) 不安

彼女が社会について考えるとき、その社会というのは、世間的注目や世の中の誘惑の場である。スペンサーは、普段は自分の信仰に何の不安も感ずることなく、敬虔なキリスト教徒として自分をとらえることができていた。「私は、キリスト教についてそれが真正なものであることを疑ったことがないという幸福に恵まれてきました。」と彼女は書いている。ところが、彼女は、ある時、社会のなかで目立つ立場にあることについて、非常な不安に襲われた。当時、慈善関連で親交のあったカーターに相談することにした。カーターは彼女よりも20歳ほど年上であり、1774年頃に、信仰上の支柱となってもらっていた。スペンサーが、聖職者ではない人に、その中でも女性に、宗教上の悩みを打ち明けていることに注目しよう。カーターは、学識と慈善活動従事の点で、スペンサーと関心を共有しており、スペンサーの立場をよく理解してくれて、非常に良心的で頼りになる存在であったので、相談相手として選ばれた。スペンサーは、自分の悩みと不安を率直に打ち明け、真面目に相談したので、カーターは誠意をもってそれに応じた。彼女の不安は、自分の生活が華やかで、瞑想的な静かな生活とは似ても似つかないものであることだった。スペンサーは、自分あまりにも忙しい世俗的生活に浸かっていることを問題にしている。また、自分がそのような生活に愛着をもっていることも、彼女の悩みの種になっている。彼女が言うには、「私はこの世のものにたいして、ひどく強い愛着をもち、宗教的義務には無関心で、そのような私の状況を考えると、恐ろしくて震えてきてしまいます。」カーターは、相手の事情を踏まえた上で真摯に対応することのできる、所謂「できた人」であるので、贅沢を捨てろとか、生活を改めろ、などという無理なことは言わない。彼女は、スペンサーが、自分の生活を肯定的にとらえることができるようなヒントを与える。彼女が勧めるのは、神に与えられた幸運な立場を受け入れる姿勢である。この回答は、スペンサーに安心感を与えるものである。

あなたは、「日々の生活で仕事があまにも多すぎて、ひとつの必要なことに注意をむけるのを妨げられている」とおっしゃいます。そういった仕事を適切にこなしていくことこそが、ひとつの必要なことです。あなたの義務は、孤独な隠遁者の抽象的な沈思黙考ではありません。あなたは、神に指名されているので、この世の中という公の舞台上で重要な役を演ずるべき

なのです。永遠を見据えて、神が認めてくださるように、その役を忠実に演ずる努力をして、常に神の助けを求めるようにすれば、すべてうまくいきます¹⁴。

カーターは、スペンサーが人々の注目を浴びることを肯定できるよう、人の社会での彼女の活躍を肯定的に考えるための支柱を提供した。人々の間で彼女が演ずることができる役割の中で、慈善活動ほど、与えられた役割であり、また罪悪感を取り除くことができる活動は他になかった。彼女の特権的立場を、神が与えた彼女の位置であり、それをどのように利用するか、よく考えれば、慈善に結びつき、カーターも関与している慈善は、ただ単に善行を行っているというだけでなく、それを社会の中で自分が果たすべき役割としてとらえて、その役割を果たすために、彼女に富と社会的地位が与えられているのであると解釈すれば、彼女の不安は解消され、そして慈善を受けて救われる人たちがいる。

スペンサーからすれば、現実の生活での自分の役割の理解が与えられて、それを意識的に演ずることは、難しいことではなかった。「世間という公の舞台」において、彼女は注意深く自分の道を歩いていくことができるようになった。

スペンサーが1814年に亡くなったときの死亡記事において、彼女は「快樂を楽しんで当然と考えられる程度に楽しんだ」と記されている。各所に広大な屋敷をもち、豪勢な生活を楽しみ、ギャンブルなどの娯楽も享受していたので、このように書かれるのも不思議ではない。そして、「彼女は自分の人生のそれぞれの立場での義務を模範的に正確に果たした」。そして「彼女は善意と信仰の役目を決して忘れなかった。」とも記されている¹⁵。

スペンサーの慈善は、非常に広範囲に及んだ。娘のデヴォンシャ公爵夫人は、次のような報告をしている。「ご一家の名誉になることを魅力的なやり方でなさっているとお母様のことが話題になっていました。[グレンヴィル夫人]がお母様の良き資質を列挙して、スペンサー伯爵夫人は過剰なほどに慈善に従事しておられる。」このような会話が交わされていて、母親の慈善活動が、話題になり、半ば意地悪なゴシップの種になっているのである¹⁶。

¹⁴ Add MSS 75696. カーターからの手紙は22通あり、返事は3通がこのコレクションに収められている。共に活躍していた慈善に関する話題の他、カーターは甥のためにスペンサーの権力を借りたらしく、庇護を提供したことへの御礼の手紙もある。

¹⁵ *The Gentleman's Magazine*, vol. 84, 1814, p. 308.

¹⁶ Georgiana Cavendish, Duchess of Devonshire and Vere Brabazon Ponsonby, Earl of Bessborough, *Extracts from the Correspondence of Georgiana, Duchess of Devonshire*. (London: John Murray,

スペンサーは、「淑女の慈善会」の重要なメンバーでもあったが、彼女の慈善は、そのような組織的なものとは別の、極めて個人的なものだった。彼女は個人と個人が直接会って話したり、個人的な手紙を受けとって、それに対処するというやり方で、慈善活動を行った。彼女にとって、慈善は、安らぎを与えるものでもあったが、個人的な慈善であっても、他人との関わりをもつので、彼女を準公的な場にさらし、人々の目につくところに彼女を置き、尊敬や嘲笑や批判の対象とした¹⁷。慈善活動は、彼女に自分の存在意義を教えてくれる場であり、そこで認められることを彼女は個人の感情の上で求め、ある程度それを得ることになったが、安全で平坦な道ではなかったのである。

ファニー・バーニー (Fanny Burney, 1752-1840) がスペンサーについて書いている書き口からも、その二面性がわかる。バーニーは、優しげで、何の悪意も罪もないという仮面を被って、実は棘のあることを言うのが天才的に上手い。

彼女は、人生を活発な慈善心と熱意を行動に移すことに使っているのも、この時代の身分の高い女性の中でも際立って模範的な人の中の一人だと言っているでしょう。その努力を、人々に知らしめるのを控えて、見せびらかすようなことをしなければ、の話ですけど¹⁸。

このように、自分の善意を人に知ってもらいたがるスペンサーの傾向についてバーニーは批判的ではあるが、スペンサーが一生懸命慈善に取り組んでいるということは証言している。

バーニーが言うように、スペンサーの慈善は広く知られていた。彼女の慈善の対象が、通常のような、裕福な有力者が、近隣の土地に住む人々にもたらす善行に限らず、幅広かったことが、広く知られていたことの要因であったかもしれない。救援を求める手紙を書くことができる人、あるいは書ける人に依頼することができる人物ならば、どこに住んでいても彼女に自分の窮状を訴え、慈悲を乞うことができた。彼女の慈善を特徴づけるのは、対象が広範囲に及ぶ

1955), p. 72.

¹⁷ たとえば次の書籍など参照: Maria Luddy, *Women and Philanthropy in Nineteenth-Century Ireland* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995), pp. 1-3; Robert B. Shoemaker, *Gender in English Society, 1650-1850: The Emergence of Separate Spheres?, Themes in British Social History* (London: Longman, 1998), pp. 209-33, 238-48; Gorsky, *Patterns of Philanthropy*, pp. 162-77; McCarthy, ed., *Women, Philanthropy, and Civil Society*; K. D. Reynolds, *Aristocratic Women and Political Society in Victorian Britain, Oxford Historical Monographs* (Oxford: Clarendon Press, 1998), esp. 1-7, 9-28.

¹⁸ Joyce Hemlow, ed., *The Journals and Letters of Fanny Burney*, I. p. 38.

ことだけではなかった。また、この手紙を介した（規模が大きくなっていたので、私設調査チームのようなものをつくってはいたが、基本的には）個人的慈善は、際立った特質をもつ。記録を残したという特質である。請願者の手紙は、組織的に整理され、アルファベット順に並べられて保管された。彼女は、貴族女性の近隣住民訪問のような、文書に残らない慈善ではなく、記録として残る手紙を介した慈善を選んだ。請願への対処も時折り手紙に書き加えられた¹⁹。このように記録を記述し、それを保管することによって、彼女は自分が世の中の役に立っていることを目にみえる形にし、そして後世に残した²⁰。彼女は、こうした記録を組織的に保管することによって、自分自身に対して安心感を与えていた。彼女の手紙への関心と執着は、彼女が選んだ自分を表現する方法である。手紙などで自分の実践や気持ちを文字に表しておくことは、感情の動きの直接の記録というだけでなく、自分が自分に対して立場を明確にする手段でもあった。自分に対して示し、確認することができるという点が重要だったのである。

4) スペンサーにとって啓蒙とは

スペンサーは、自分の生活を統御しているという意識をもつことに熱心だった。どうやって時間を使うか、どのようなスケジュールで一日を過ごすか、彼女は時間管理をしばしば気にしていた。自己管理には、身体の適切な節制と鍛錬も含まれ、食事と運動が規律の一部であり、快楽が得られるからそれを行うというより、それを管理すると、正しい身体を得ることができ、その満足感が彼女にとって喜びである。規則正しく過ごすこと、計画を立てること、システムチックに物事を行うことを非常に好んだ。彼女は、自分の人生、生活に、何らかの意味と構造をもたらしたかったのである。彼女の言葉を借りれば次のように簡潔に表現される。「方法と規則を私は崇拝しています。」²¹

¹⁹ 記録として残らない女性の日々の活動と、文書として残る記録の傾向に関する研究については、たとえば、Katharine A. Jensen, “Male Models of Feminine Epistolarity; or, How to Write Like a Woman in Seventeenth-Century France,” in *Writing the Female Voice: Essays on Epistolary Literature*, ed. Elizabeth C. Goldsmith (Boston: Northeastern University Press, 1989), 25-45.

²⁰ 何を動機として慈善を行うものであるのかに関する考察では、次の論文参照：Sandra Cavallo, “The Motivations of Benefactors: An Overview of Approaches to the Study of Charity,” in *Medicine and Charity before the Welfare State*, ed. Jonathan Barry and Colin Jones (London: Routledge, 1991), 46-62.

²¹ ‘Method & regulation you know are my Idols’, Spencer to Howe, June 12 1784.

時間を自分の管理下におくことを自分の人生の重要な部分だと考え、彼女は重視した。うまくできれば、心と頭脳の改善につながると考えたからである。

時間を無駄に過ごすことをやめます。年をとると、この有用品をもっと注意して使わねばと思います。最も長生きした人でも、とても少ない時間しか有益に使っていないということを考えると、怖いです。自分自身や他人のために使っているかどうかという問題です。現実に行っているよりも上手く過ごすことができる機会があるものですが、自分の仕事を計画すること、つまり、心と頭脳の改善、同朋の役に立つこと、特に不幸な人々の役に立つこと、・・・アーサー王だったのでしょうか、それともアルフレッド王だったのでしょうか、忘れてしまったのですが、一日24時間を3つに分けて、8時間を睡眠に、8時間を娯楽と休息に、8時間を仕事と勉学に、あてたのです²²。

昨日読んだスペクテーター第93号はすてきなもので、時間の浪費と使い方が話題になっていました。24時間を8時間ごとに3つに分けて、8時間を仕事、勉学、そしてもっと深刻な事項に、8時間を食事、娯楽、社会での軽い任務に、8時間を休息に、という使い方は、隠遁している人にとって不都合でなく、仕事が忙しい人や学問の追求に深く携わっている人にも合うもので、改善のための余裕がありながら、もっとずっと厳格でない割り当てで私なら満足であるけれど、6時間の休息、6時間は部屋にひっこみ、12時間を社交と娯楽に。このくらいがちょうどいいでしょうか。それでも一日に4時間、2時間、いえ、1時間でも勉学や思考にあてられたら・・・方法と規則を私は崇拝しています。・・・²³

彼女にとって、時間をどのように計画して使うかが重要な問題である。加えて、食べ物は、欲望を満たすものではなく、節制を行って、自分を試す手段となっている。彼女は、食べ物に関する節制により、身体を快適に保つことができると信じ、自分で実践するだけでなく、ハウにも同じように行うことを勧めている。

ロンドンを出てから、肉をまったく口にしておらず、とても禁欲的に生き

²² Spencer to Howe, Nov 12 1782.

²³ Spencer to Howe, June 12 1784.

ています。普通は、焼きリンゴで夕食にするのですが、今晚は全く何も食べていません。そうするとどういふことになるのか試してみるためです²⁴。私が決めている食餌にあまりにも厳格に従わないようにしている主たる理由は、お腹がそれに慣れきってしまって、(使わないために)ちゃんとした食べ物を消化できなくなってしまう危険があるからです。その食餌は、実は私には多くの面で合っていて、私の神経に悪いということはありません。あなたもご存じのように、神経がやられているときは、一瞬でも一人で部屋にいることができませんでしたから²⁵。

彼女の意識では、個人の身体と生活の管理は、社会全般にとって有益なものに繋がっている。日常的に規則正しく運動することにより、自分の健康を保つことができる。それにより、自分の義務(たとえば慈善)を遂行することができ、社会の要請に応えることができる。自分の日常生活を統御することは、彼女の見解では、すべてを可能にし、自分の人生を肯定的にみることができるとの道を開くものである。目の前の具体的な日常生活は、彼女が生きている家族、地域、社会と直結し、またその先の精神的・宗教的世界とも直接的につながっている。

しかし、彼女の思考には問題点があった。彼女は、大人になってから、自分の年齢よりも古いものにより、強い影響を受けていた。彼女にとって、それは普遍的で、古びないものであり、教えと魅力を決して失わないものだった。定期刊行物『スペクテーター』である。18世紀初めの画期的出版物である。彼女の人生にとって重要なことを表現した上記の一文「方法と規則を私は崇拝しています」も、『スペクテーター』の記事についてハウ夫人に書いている手紙の文脈で記されている。『スペクテーター』は、スティールとアディソン(Richard Steele, 1672-1729; Joseph Addison, 1672-1719)が、1711年3月1日付から1712年12月6日付で日刊で発行し、1714年にはアディソンが再刊行して80号分を出した。最も成功し、人々に影響を与え、そして時代を象徴した刊行物のなかの代表と言ってよいだろう。

アディソンのスペクテーターの一節です。アディソンはわたしのお気に入りだと知っているでしょう。彼の言葉には、私の心に直接届くような道を

²⁴ To Mrs Howe, Nov 13 1782.

²⁵ To Mrs Howe, Nov 2 1782.

見つける力があって、切望することで雄弁を手にいれられるのであれば、彼の文章を目標にしたいといつも思っています。私が読んだイギリスの作家の多くは、なんらかの欠点をもっています。ジョンソンは術学的だし、リットルトンは気取っているし、パークは華々しい、ウォルポールは奇抜、ボリングブルックやヒュームやチェスターフィールドやギボン、独特であることを除いても、それぞれ本質的な反論があります。でもアディソンは、表現が優雅で、古典の知識があり、朗らかな敬虔さをもち、他のどんな作家よりも、人の内面を悦ばせ、教え導き、そして改善するのです²⁶。

自分が生まれる前、父親が若かったころの雑誌を普通、人はどのようにとらえるだろうかと考えると、『スペクテーター』の圧倒的な強さと、進歩思想の停滞の両者が浮かび上がる。スペンサーは、1780年代に、1711年の記事を愛読していた。1711年の記事が進歩的であると受けとったのである。12号の記事を見てみよう。ここでは、幽霊に興味をもつ人が話題にあがっている。スペンサーは、この着想が役に立つもので、ほっとするとも考えている。彼女は、この世のものでないものに見られていると考えることにやすらぎを見出している。そう思うと、「善行を重ねるための励みになる」と思えるからである。霊は彼女にとっては、監視してくれていて、善行と自己規律をみてくれるものであるのだ。さらに、愛する人たちの魂がいつも自分と共にあるようにと願う。霊が「私たちの安寧に関心を持ち、私たちの人生が正しくあることと、私たちの心の改善を気にかけてくれている」ような気がして、安心を得ている。

彼女がこんな事を思っていたのは、夫が亡くなって半年ほど経った頃である。ここで彼女が想定しているのは、「愛する人たち」であって、亡き夫だけを考えているのではないものの、夫が近い過去に死亡したことと多少関係があるだろう。このような魔術的で超自然的な霊、魂、幽霊のようなものを思い描き、それからの作用が自分の人生を動かしていると考えすることは、迷信的で古風であるかもしれない。ただし、彼女は、この想定が、自分の想像力をあやつって、自分の行動を制御していくための現実的な方法であると意識して、これを行っている。超自然的なものに支配されるのではなく、超自然的なものを利用して、それを目的を遂行するための方法としていることを意識している点が、近代的あるいは現代的である。彼女の思考で重要なのは、自己管理という大きな目的

²⁶ Spencer to Howe, Jan 2 1780.

のために意識的に状況を利用することである。

彼女にとって、啓蒙とは、日常を意識的に管理し、計画に則った毎日を、方法と規則に従って送ることだった。そこに必要なのは、自分で設定した自分を監視する自己である。たいてい彼女は自己肯定的に満足して幸福に包まれて暮らすことができる。しかし、彼女は、自己懐疑的、自己批判的になることができ、自分に対する疑念をもち、そして他人にそれを伝えることができた。

彼女の知覚においては、書物や定期刊行物など出版されたものから得た知識が、日常生活において、自己鍛錬を行うようにと促した。自分で意識して、日々の規則的な生活管理を行い、定期的に運動し、食べものに気をつけることが、正しい健康な人間をつくる。彼女にとって日々重要だったのは、自分で決めた節制のある規則正しい生活を、ほぼ毎日、ハウに書き送ることだった。彼女の生活の基本を作っていたのは、書物や定期刊行物などの出版物から得た知識だった。出版物が、この人物の個性や個人的体験を形成していた。そして、彼女の日常生活や日々の思考は、手紙に流し込まれ、情報や感情の表現が文通相手と共有されることになった。彼女の経験、日々の行動は、社会の中で特権的に恵まれた人物ではあるが、社会の普通の人の実践だった。刊行物を読んでもらうことによって、哲学を専門家の閉じた空間から、「クラブや集会、茶会、コーヒーハウスへと」もたらした『スペクテーター』は、その発刊から半世紀以上経ったときに、その教えの実践を一般人にみることになった。彼女の方針は、文書に書いてあることを実践したもので、その実践は、手紙に書かれ、文字になったものとして運ばれていった。テキストは実践へ、実践はテキストへ、という情報の流れが彼女の周辺にはできあがっていた。テキストと実践との間の行き来は、らせん階段のようにつらなり、それが彼女の幸福のレシピだった。この教養ある女性にとって、啓蒙は、文書から実践へ、実践から文書へという情報の流れで形成されていた。